



Title	ウェブログの計量的文体研究：文末表現とウェブ記号との関係を中心に
Author(s)	岸本, 千秋
Citation	阪大日本語研究. 2018, 30, p. 17-39
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/70097
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ウェブログの計量的文体研究 —文末表現とウェブ記号との関係を中心に—

A study of quantitative stylistics in Blog:
Relations between “sentence-final expressions” and “Web Mark”

岸本 千秋
KISHIMOTO Chiaki

キーワード：ブログ、ウェブ記号、終助詞、接続助詞、共起強度、対数尤度比検定

要旨

ブログの文体研究の一環として、終助詞とウェブ記号、また、言いさし文の終結部である接続助詞とウェブ記号の共起関係について、対数尤度比検定を用いて確認し、それぞれについて次のことを明らかにした。まず、終助詞とウェブ記号との共起関係では、「ナ」が他の終助詞よりも共起する強度が大きく、願望や希望などを表す際にウェブ記号を用いる傾向にあるとした。反対に、終助詞「カ」はウェブ記号との共起強度が小さく、その原因としてクエスチョンマークとウェブ記号が重複して用いられることが少ないとした。次に、言いさし文の終結部である接続助詞については、「ケド」と「ノデ」の2種が他の接続助詞に比べてウェブ記号と共に強度が大きいことが分かった。ケド節には緩衝機能が認められ、ウェブ記号はケド節と共に緩衝機能を担うことを見た。「ノデ」に付加するウェブ記号には、「ノデ」がもつ「言い訳」のイメージを緩和する役割があるとした。

1. はじめに

本研究の目的は、ウェブログ（以下、ブログ）の文体を、文字・表記・表現、書き手の意識すべてを含めた総体としてとらえ、明らかにすることである。本稿では、中でも特に中心となる、文字・表記・表現からのアプローチにおいて、計量的な分析方法を用いたり迫る。

ブログには、次の（1）（2）のように、フェイスマークやカッコつき文字といったウェブ記号が多く使われ、これらはブログの文章に見られる大きな特徴の一つである。

- (1) 金欠ってやつですよ（—；；；
- (2) 病気の時はわがまま炸裂になるね（笑）

ウェブ記号とは、「フェイスマーク」「カッコつき文字」「絵記号」の3種をまとめて言い（岸本2006）、次のように定義される。

【フェイスマーク】

記号を組み合わせて人の顔（表情）や人体のポーズを表したもの。

例： (^^) 丶 (' - `) ノ (TOT) (>_<) _|_|○ など。

【カッコつき文字】

丸ガッコ・パーレン（ ）でくくられた文字。かっこ内に入る文字はそれだけで意味を成すかどうかは問わない。1字以上、文節数2以下とする¹⁾。まれに、後ろのカッコが落ちる場合もある。

例： (笑) (汗) (泣) (爆) (オイ) (待て) (お (東北なまり風に)) など。

【絵記号】

上記2種類以外の記号類で、音符やハート、星などをかたどったもの。

例： ♪ ☆ v ♥ など。

記号には、疑問符「？」や感嘆符「！」などもあるが、これらは、表記に関する教科書など（沖森ほか2011、佐竹ほか2005など）で、符号・記号の項目として取り上げられ解説がなされている。つまり、ウェブ記号に比べると、従来用いられてきた、より一般的な符号・記号に位置付けられているものである。したがって、本稿では、これらの疑問符・感嘆符を、それ単体の出現ではウェブ記号には含めていない。ただし、ブログにはこれらの「従来型記号」（岸本2005a参照）が複数個連続して使用される場合があり²⁾、それらについては、一般的な書きことばに用いられる形式とは異なるという判断によりウェブ記号として扱った。

このようなウェブ記号は、その直前の文が述べている内容と強く関係するというのが筆者の見方であり（岸本2017ほか）、ブログの文体というものを考える際には、ウェブ記号の出現状況を含めてとらえることが必要であると考える。もちろん、ウェブ記号は、ブログのみに特徴的に用いられる記号ではない。たとえば、雑誌などの対談記事には、文末に（笑）が現れ、そこで笑い声が起こと、あるいは笑いながらの発話であったことが、読み手に伝わるように示されることはよく知られたことである。また、ブログ以外のSNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）にも、ウェブ記号とほぼ同種の絵記号、絵文字等が使用されている。

これら各メディアに使用される記号が、それぞれまったく異なる出現の様相を呈していると言えはそうではない。先に挙げたように、対談記事などで用いられる（笑）は、文末に示されることがほとんどである。ケータイメール研究（三宅2005）では、「句読点の代わり程度の役割」として、絵記号類が文中・文末に現れることが示されている。また、新井（2017）は、日本語と韓国語のTwitterを比較し、「韓国語より日本語のTwitterに体言止め文という省略現象が多く現れる理由として」、「絵記号類を利用できるというメディア環境に加えて、日本語

母語話者のヴィジュアル・コミュニケーションへの志向性（三宅 2005）により絵記号類、視覚的要素が文末に来てモダリティを代替して表す」ことを指摘している。これは、ウェブ記号（絵記号類）の出現する位置が文末であることに加え、ウェブ記号が書き手の態度の表明に関係することを示唆するものである。つまり、文末に現れるモダリティ要素と、そこに加えられるウェブ記号とは何らかの関係性をもつ可能性が高いと言える。

本研究が対象とするデータは、ブログの文章とウェブ記号であるが、上記の三宅（2005）、新井（2017）のような他メディアに現れるそれぞれの記号類が、文のどの位置に現れるか、どのような文と共に起するか、共起した場合には文とどのような関係性を有するかといった点においては、一般化が可能であると考える。これについては、5節で少し触れる。

本稿では、これらのこと前提とし、文末に現れるモダリティ表現とウェブ記号との関係を量的に調査し、ウェブ記号の有無によって文体が異なることを明らかにしたいと考える。ウェブ記号も文体をとらえるための要素として扱うということである。具体的には、ウェブ記号の有無による文の比較を通して、次の2点について考察を行う。一つは、終助詞とウェブ記号との関係についてであり³⁾、一つは、言いさし表現とウェブ記号の関係についてである。これらの出現状況にどのような傾向があるのかを探る。

なお、本稿は、終助詞と言いさし表現とを考察の対象とするが、取り上げる終助詞や言いさし表現における接続助詞の種類、また、それぞれの定義やその働きなどについては、先行研究や文法の教科書、国語辞典などに記されている基本的な事項を援用することとする。

上記のTwitter、ケータイメールなどは、大きくは電子メディアというくくりでとらえられるものであり、絵記号類はブログに用いられるウェブ記号の類と基本的に同種と言って問題ない。また、繰り返しになるが、本稿における考察は、ウェブ記号が付加された文か、付加されていない文かの別による比較を第一としている。したがって、ウェブ記号それ自体を機能や意味によって分類すること、また他メディアとの異同を明らかにすることなどは本稿では扱わず、今後の課題としたい。よって、以下の調査・分析では3種のウェブ記号をまとめて取り扱うこととする。

2. 先行研究

文を対象に、文末に現れた終助詞とウェブ記号（絵記号類）について、また、言いさし表現とウェブ記号（絵記号類）について、それぞれの関係をとらえようとした研究は、筆者の見る限りでは見当たらない。

ただし、終助詞と非言語表現についての関係を論じた研究として、石井・孫（2013：以下、

孫（2013）とする⁴⁾がある。孫（2013）では、「テレビ放送のマルチメディア・コーパスを使って話し手の言語行動における言語表現と非言語表現との関係や、そうした言語行動と映像（化）との関係を、計量的な調査によって明らかにしようという試み」（まえがき i）がなされている。その一つが、終助詞「ネ」と視線行動との関係についての調査である。終助詞「ネ」とその発話時における視線行動との関係について、<同意要求><確認要求>の「ネ」と、<自己確認>の「ネ」とでは、話し手の視線行動に違いがあるという結果を示した。そして、その違いは、<同意要求><確認要求>では、「ネ」が使われる際には、「話し手の視線は、ほぼ確実に聞き手に向けられて」（129）おり、一方、<自己確認>の場合は、聞き手以外に向けられる場合もあるというパターン化された傾向を見出した。

孫（2013）で調査・分析の対象とされたのは、終助詞と非言語表現が同時に行われる現象であり、本稿が扱う終助詞とウェブ記号との関係とは、一見、直接つながらないように思われる。しかし、「ネ」と「視線行動」が同時に行われているという孫（2013）の結論は、「「ネ」と同時に何かを行う」、あるいは、「「ネ」に何かを追加する」という点において、「ネ」とウェブ記号とが共起する現象と何らかの共通点がありそうに思われる。本稿では、この点を終助詞「ネ」とウェブ記号の有無を論じる際の参考とする。

3. 調査概要

3.1. データ

データを収集したインターネットサイト、及び、データ収集の条件等については、岸本（2017）と同様である。ただし、本稿では、調査過程において、再度、ランダムにデータを抽出しており、実際の分析データは本節末尾に示した表2である。調査データの抽出方法などについては、岸本（2017）と一部重複するが、手順を追って説明する。

データを収集したのは、「さるさる日記」という日記サイトである。ここでは、登録者が年代別に分けられており、データ収集時（2003年3月現在）の登録者数は、10代～30代がもっとも多い。その中から19歳から22歳の書き手に限定しデータを収集した。この年代では、記号類を多用するなど、特徴的表記が散見される。また、更新が頻繁に行われていることを条件とした。

「さるさる日記」が開設されたのは1999年であり、インターネット上にブログサイトが登場し始めた初期にあたる。その後、2003年に無料で開設できるサイトが登場したことにより、多数のサイトが登場し利用者も増え、アクティブブログ（1か月に1回以上記事が更新されているブログ）が2004年から2006年にかけて急増した（図1）。図1によれば、平成20年（2008年）

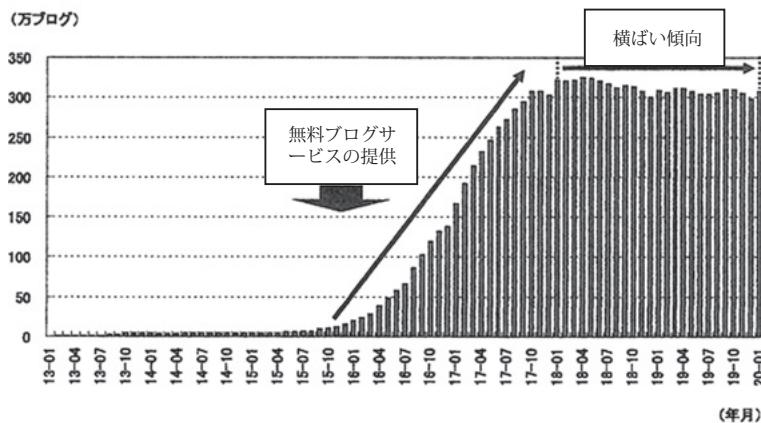


図1 国内のアクティブブログ数の推移 総務省（2011）より

現在で約300万ブログがアクティブブログとなっている。

このような流れの中において、進化や変化が目覚ましい電子メディアという媒体の特性もあり、記号類についても種類がバラエティーに富むようになるといった変化が見受けられる。そのような点においては、できるだけ新しいデータを収集し分析対象にすることにより、たとえば、以前と比較してどれほど新しい種類の記号が誕生しているか（種類が増加したか）といったことを知るメリットはある。しかし、種類の増加は、スマートフォンの普及など、機器の変化によるところもあり、種類以外の、たとえば記号のみで文章がつづられるとか、出現位置が文頭に偏るなど、極端に従来と異なるような用いられ方の変化は観察されない。したがって、文と記号との関係をとらえるという本論の主たる目的において、最新のデータか否かという点はさほど大きな問題にはならないものと考える。

データの抽出方法としては、標本抽出法の層別抽出によることにし、登録者の層別として男女の別に分けた。19歳から22歳の登録者数は、女1に対して男約1.15の割合になっている（2003年12月現在）。そこで、抽出する人数の比を、ほぼ同程度の比になるよう設定し、書き手一人当たり1日～3日分のデータをテキストデータとしてデータベースに取り込んだ。それらをウェブ記号が付加された文（以下、「ウェブ記号アリ」とする）と、ウェブ記号が付加されていない文（以下、「ウェブ記号ナシ」とする）とに区別した。具体的なデータの数値は表1の通りである。

表1 データ

	対象人数(人)	ウェブ記号アリ(文)	ウェブ記号ナシ(文)	計(文)
女	486	2,138	14,445	16,583
男	597	1,848	15,709	17,557
計	1,083	3,986	30,154	34,140

ただし、本稿は、ウェブ記号の有無を文の比較基準として調査・分析を進める予定であり、表1では、データ数の差が大きいためバランスが悪い。そこで、ウェブ記号ナシのデータについてのみランダムに抽出し、ウェブ記号アリと同数にすることにした。その際、「萌え（おい）」のような一語文と、かぎカッコでくくられた会話文の2種類については、ウェブ記号の有無にかかわらず対象外とした。一語文は、文末表現そのものの認定が困難であるためであり、会話文は、少しでも書き手以外（つまりその会話文の話し手）のモダリティ要素が入っている可能性を排除するためである。そのようにして、抽出し直したデータが表2である。本稿では、ここに挙げた計4,962文を分析・考察の対象とする。

表2 本稿の調査対象データ

	ウェブ記号アリ(文)	ウェブ記号ナシ(文)	計(文)
女	1,108	1,108	2,216
男	1,373	1,373	2,746
計	2,481	2,481	4,962

3.2. 分析方法

本稿では、ウェブ記号がどの終助詞、また、どの接続助詞と共に起しやすいか、あるいは共起にくいかという点を分析の中心とする。

その方法として、まず、対象データから終助詞・接続助詞の種類ごとに出現頻度をカウントする。次に、各終助詞・各接続助詞について、ウェブ記号との共起強度の度合いを対数尤度比検定⁵⁾によって求める。対数尤度比の計算は、ウェブ記号と終助詞、また、ウェブ記号と接続助詞がそれぞれ共起する強度を計量するために行うもので、求められた数値によって、ある終助詞・接続助詞が、他の終助詞・接続助詞に比べてどれほど強くウェブ記号と共に起しているかを知ることができる。それによって、出現頻度の差が有意であるかどうかの判定が可能になる。その上で、ウェブ記号が、文とどのようにかかわるか、また、どのような機能をもつのかについて考察を行う。

終助詞の種類については、基礎的な文法の教科書に取り上げられている、「ネ」、「ヨ」、「カ」、「ナ」、「ワ」などを代表的な形として設定する。ある終助詞が別の終助詞と複合している、たとえば「カナ」などや、異形の「ナア」「ナッ」などは、個々に用例を確認した上で「ナ」としてカウントした。「ヨネ」は「ネ」に含めた。そのほか、出現頻度の低いものや方言と思われる形式の終助詞は「その他」としてまとめている。なお、本稿では性差の観点からの分析は行わなかったため、男女別ではなく、男女を合わせた全体の数値を示し分析・考察を行う。

4. 結果

以下、4.1節で、ウェブ記号と終助詞との共起関係について述べ、4.2節では、ウェブ記号と言いさし文の接続助詞との共起関係について述べる。

4.1. ウェブ記号と終助詞との共起

表3に、終助詞ごとの「記号の有無別の出現頻度数」・「出現頻度数の合計」・「対数尤度比(G^2)」を、対数尤度比の降順に示す。複数の助詞を含んでいる「その他」については検定を行わず、計算上の頻度の合計に含むこととする。

表3 終助詞とウェブ記号の有無（頻度／対数尤度比）

終助詞	記号アリ（男女）	記号ナシ（男女）	頻度合計	G^2
カ	19	28	47	17.87***
ナ	113	39	152	11.86***
ヨ	75	50	125	1.75
ネ	160	114	274	0.92
ワ	19	8	27	0.12
その他（サ/ヤ/ゼ等）	28	7	35	
計	414	246	660	

*** = $p < 0.001^6)$

まず、終助詞全体では、ウェブ記号アリの出現頻度が414、ウェブ記号ナシの出現頻度が246、計660となっている。ほぼ6対4の割合で終助詞が現れた時にウェブ記号が付加されており、ウェブ記号と終助詞全体とのゆるやかな結びつきが確認できる。では、終助詞別ではどうだろうか。「頻度合計」欄で、どの終助詞が多く出現したかという点から見てみよう。すると、ウェブ記号の有無にかかわらず、「ネ」「ナ」「ヨ」が多く用いられていることが分かる。中でも

「ネ」は274と全体の4割強となっている。これらの終助詞は、書きことばよりも話すことばに用いられやすい傾向にあるが、これは、ブログが話すことば的であること、また、「読み手を意識した表現」が用いられていることからも当然の結果と言えよう。

では、共起のしやすさはどうだろうか。ウェブ記号と終助詞との共起関係の強さは、「カ」($G^2 = 17.87$)と「ナ」($G^2 = 11.86$)の2つの終助詞について有意差が認められる。この結果によって、「カ」はウェブ記号とは共起しない傾向にあること、そして、「ナ」は他の終助詞よりもウェブ記号と共に起する傾向にあることが示唆された。そこで、まずは、「ナ」について、ウェブ記号と共に起する場合と共に起しない場合との比較を通して、共起しやすさの理由を探ってみたい(4.1.1節)。次いで、4.1.2節では「カ」について、4.1.3節では「ネ」について分析を行う。

4.1.1. 終助詞「ナ」

終助詞「ナ」には禁止を表す意味もあるが、本データでは見当たらなかった。データのほとんどが、以下(3)(4)(5)のような例であり、これらは、読み手に向かっているというよりも、いずれも独話であることがうかがえる。(3)(4)は、体験したことがらなどについて感動した気持ちを表し、(5)は、書き手の願望を表していると言えるものである。

- (3) けどけど、覚えててくれてうれしかったなあ (*'▽`*)
- (4) やっぱりマンションはいいよなあ～～～ (><)
- (5) 早くみんなでワイワイ出来るようになるとイイナッ (^Q^)/^

他方、ウェブ記号ナシの(6)(7)(8)も、同様に独話ととらえられるものであるが、(3)～(5)の用例とともに、ブログが一種の日記と定義されることを考えると、特筆すべきことではないと言える。

- (6) 友達としては絶対にうまくやっていく自信があるのにな。
- (7) 明後日は県南あるからそれに向けてがんばんないとな。
- (8) 前みたいに楽しく食事したいな。

ただ、次の2点については、ウェブ記号アリとウェブ記号ナシとの違いが認められる。一つは、「ナ」の表記についてであり、単に「ナ」であるか、「ナア」、「ナッ」のような変形が使われているかという点である。「ナ」のウェブ記号アリは、男女合わせて113文(女58文、男55文)であるが、そのうち、「ナア」のような表記は、45文(女33文、男12文)であった。一方、

ウェブ記号ナシの39文については、そのような変形が一例も見当たらず、「ナ」のみである。もちろん、これはこのデータに限ってのことであり、他の話したことば的なデータでは、「ナア」のような表記がなされる場合があるだろう。しかし、感動や願望を表す際には、やはり「ナ」よりも、「ナア」や「ナッ」の方が、よりそれらの気持ちを込めているような表記だと言える。そして、そのような表記には、ウェブ記号がより付加する傾向にあると考えられるものである。

もう一つは、(3) (4) (5) のような「感動」や「願望」の気持ちを表すような内容をもつ文そのものが、ウェブ記号ナシには少ないということである。(8) のような希望や願望を表している例や、「好きな歌が時々かかる嬉しいな。」の「嬉しい」ように直接的に感情を表す語を用いた例は、男女合わせて10例（女8例、男2例）しかない。反対に、ウェブ記号アリには、感動や願望を意味する文が多く存在する。このことは、「感動」や「願望」などの意味をもつ文は、ウェブ記号ナシに比べて、ウェブ記号との相性が良い傾向にあることを示すものである。

さらに、願望や希望などがことばとして表現される場合には、ウェブ記号アリはそうでない文に比べて、表記の上で二つの操作が余計に行われる傾向が強いということである。一つは、終助詞「ナ」に長音や促音を追加することであり、それによって、その文に表された願望や希望などの気持ちがより強いことが表されると言える。もう一つは、それと同時に、ウェブ記号が付加されることであり、それらの感情の強さが、わざわざ作業を増やすことで、視覚の面からさらに補強されていると言えるものである。話すことばにおいても、「ナ」より「ナッ」や「ナア」が、より話し手の意図を強く表現できることと同様であろう⁷⁾。

さらにこの結果は、岸本（2017）で明らかにした「品詞構成比の比較においては、感動詞、形容動詞、動詞、副詞、形容詞の各語が多く使われている文にウェブ記号が付加しやすく、その中でも、特に、感動詞、形容動詞、副詞については、ウェブ記号ナシとの違いが大きい」とと矛盾するものではない。つまり、モノなどの名詞が表わされた「静的」な文ではなく、感情、あるいはその感情の程度が、感動詞、形容動詞、副詞で表わされた「動的」な文にウェブ記号は付加する傾向にあり、それは、終助詞「ナ」が文末に付くことでも担保される。岸本（2017）では、「書き手の感情を勢いよく述べるため」の「文長が短くて、感動詞、形容動詞、副詞に相当する語が多い文」にウェブ記号が付加されやすい傾向にある」と結論付けた。その議論によると、終助詞「ナ」が文末に付き文字数が1字増えることは、「文長が短い」とと相容れないようと思える。しかし、それは終助詞の問題ではなく、「何を述べているか」という叙述内容に問題の核心があるとどちらるべきであろう。

4. 1. 2. 終助詞「力」

先に確認した通り、「力」についてもウェブ記号の有無による有意差が認められた。出現頻度

は、全体で記号アリが19、記号ナシが28である。これら全47例の「カ」がどのような意味を表しているかを確認したところ、明らかに他人に向けた内容だと言える例は、「質問・疑問」を表している1例のみであった（「これを読んだ彼方は呪いを信じますか？」：ウェブ記号ナシ）。残りの46例については、たとえば（9）のような自問の例が31例（アリ14、ナシ17）、（10）の、格言めいた内容を自分自身で確かめたり言い聞かせたりするような例が4例（アリ0、ナシ4）であった。また、（11）のような、自問の形式で、落胆・嘆きを表すものが8例（アリ3、ナシ5）、（12）のような反語の形で気持ちを強く確かめる例が4例（アリ2、ナシ2）であった。

- （9）どうやって別れたらいいんだろうか。
- （10）どれだけ強く心をもてるのかで人はかわるのではないか？
- （11）一晩天王寺に放置は無謀だったのか」――|○
- （12）嗚呼、あたしのあゆへの愛はこんなモンなのか～（涙）

しいて言えば、格言のような意味のあることを自分自身に言い聞かせる例がウェブ記号ナシにしか見当たらなかったが、それ以外では、目立った傾向はないと言えそうだ。ただ、ウェブ記号が付加されない場合は、（10）のように疑問符「？」が付加されている例が28例中8例あった。確かに、データ全体を確認しても、疑問符とウェブ記号とが重複して用いられている例はほとんどなく、疑問符の存在が、ウェブ記号が付加されない理由となる可能性はあると思われる。

また、ウェブ記号ナシの（9）（10）は、ウェブ記号アリの（11）（12）と比較して、内容そのものがやや真面目で固いという違いが見受けられる。（11）（12）では「無謀」「嗚呼」のような表現が用いられたり、「モン」「～」のような標準的ではない表記が使用されたりしていることからも、ウェブ記号アリに比べてウェブ記号ナシは、何がどのように書かれているかという点で、より規範的な書きことばに近いととらえられる。それゆえ、ウェブ記号と相容れないという可能性が考えられる。

4. 1. 3. 終助詞「ネ」

終助詞「ネ」($G^2 = 0.92$)は、「ナ」・「カ」に比べると対数尤度比での明確な有意差は得られなかった。したがって、「ネ」は他の終助詞に比べて、ウェブ記号と強く共起して（また共起せずに）出現する終助詞とは言えず、「ネ」とウェブ記号との共起関係という点では、特段、取り立てて扱うような傾向があるとは言えない。しかし、「ネ」は、ブログの文章における終助詞のうち、出現頻度が274と群を抜いて高い。ブログのような話すことば的な文章において、頻

繁に用いられる終助詞ということである。そして、計量的研究において頻度が高いということは、そのコーパスにおいて十分に意味をもつ。

2節でも述べたが、孫（2013）では、次の3つの場合の「ネ」を取り上げ、分類については「宮崎（2002）の「聞き手の認識」をもって「ネ」の用法を分類し」（122）たとしている⁸⁾。

＜同意要求＞：話し手が聞き手に「同意」を求めながら持ちかける場合。話し手がその場で認識したことを、聞き手も経験していたり直接知りうるような場合。

＜確認要求＞：話し手が聞き手に「確認」を求めながら持ちかける場合。話し手の認識したことが、聞き手にかかわることからで、聞き手の方により確かな認識があると判断される場合。

＜自己確認＞：「同意」も「確認」も求めずその場で認識したことを単に持ちかける場合。話し手の認識したことを、聞き手が直接知ることのできない場合。

そして、聞き手の認識をそれほど考慮せずに反応を求める＜自己確認＞の用例がもっとも多いこと、＜同意要求＞＜確認要求＞では、「ネ」が使われる際には、「話し手の視線は、ほぼ確実に聞き手に向けられて」おり、＜自己確認＞の場合は、聞き手以外に向けられる場合もあるという結果を示している。

本稿でもこの3分類に従ってデータを確認する。ブログのデータでは、＜同意要求＞＜確認要求＞と判断できるものはほぼなく、ほとんどが＜自己確認＞である。これは、先述したように「ナ」において独話が多いこととも通ずる。また、対談など確実に聞き手が存在しているテレビ番組に比べると、あくまでも文字のみによる判断しかできないブログの場合は、読み手を想定して書いているという推測しかできず、読み手の存在は明確ではない。したがって、テレビ番組とブログとを同様にとらえることは無理があるかもしれない。ただ、孫（2013）で考察対象とされた、「ネ」と「視線」との関係を、「ネ」と「ウェブ記号」とに置き換えて考えてみると、「「ネ」と同時に何かを行う」、あるいは、「「ネ」に何かを追加する」という点において、「ネ」とウェブ記号とが共起する現象と何らかの共通点があるかもしれないと考えることも可能である。「ネ」とウェブ記号とが共起するのは、たとえば（13）（14）のようなものである。（15）（16）はウェブ記号ナシの例である。

（13） まあ、暖房きいてて暖かかったからいいんだけどね（^_^；）

（14） あ、七不思議ってことにすれば合点いきますね（爽

（15） じつは先週一度水没して壊れたんですけど、メモリは無事だったんですね。

(16) わざわざ毎回お金払ってまでして通うってのは、愛情ですね。

ブログは、読み手の存在を想定している可能性はあるが、現実には読み手はその場には存在しない。したがって、ブログに使用された「ネ」は、<自己確認>の場合に用いられることがほとんどである。そして、<自己確認>の場合、読み手の反応を求めたり促したりすることはないと言えられる⁹⁾。用例を確認しても、ウェブ記号の有無にかかわらず、読み手に対して反応を求めるような<同意要求>や<確認要求>を行っているとは言えられない。

言うなれば、「ネ」で述べた内容を自己の認識の中で処理（確認）できればそれでよく、読み手に叙述内容を届けたいとか返答を求めたいという「積極的」な意思は感じられない。この場合、「ネ」が向かう「第一」の方向は、書き手自身の内側であって、読み手に向かったものではないと言える。そうであれば、そこに付加されるウェブ記号も他者への伝達よりも、自身の叙述内容そのものに強く関係すると考えられる。つまり、叙述内容を表現することに主眼がおかれて、それが読み手に伝わるかどうかは二の次ということである¹⁰⁾。そのような<自己確認>の「ネ」に付加されたウェブ記号は、同じく<自己確認>の機能をもつと考えられる。先に見た「ナ」も「ネ」と同様に非対話的な場面で現れるが、「ナ」が感動や願望などによる感情の高まりを表現したり詠嘆したりという、どちらかと言えば感情が強い場合に現れるのに対して、<自己確認>の「ネ」は、感情の強さの程度がどうであるかというよりも、叙述内容の「認識」という点に注意が向けられていると言える。それがウェブ記号との共起強度の差となったと考えられる。

4.2. ウェブ記号と言いさし文との共起

文末表現として、もう一つ、接続助詞で終結する言いさし文について見ていく。言いさし文は、書きことばよりも話すことばに現れる場合が多く、ブログにも次のような例が散見される。

(17) ほんとは一人で静かに行けたらもっとよかったです (^_^;)

(18) なあ～～んも用意していないのにね ((爆))

言いさし文については、白川（2009）の冒頭で次のような問題提起がなされている。

「から」や「けど」は接続助詞であるので後に語句が続くはずなのにそこで文が終結しているし、従属節は主節に従属しているはずなのに肝心の主節が欠落している。（中略）

規範文法的立場に立てば、続くはずの語句が続いておらず存在すべき主節が存在しない

のだから、当然、主節を言わずに従属節だけ言って途中でやめた文ということになる。上のような文が「言いさし文」と呼ばれるのは、このような規範意識を反映している。

しかし、「言いさし文」は、あるべき言葉を補って完全な文に修復しなければ説明できないような不完全な文なのだろうか。(中略) そうだとしても、「から」や「けど」が元々このような構文を可能にするような性質を持っており、話し言葉と書き言葉で運用のしかたが違うだけであるといった説明に持って行けたほうがより説得力があるのではないか。

(白川2009 はじめに i)

ここで示されたように、書きことばより話すことばに多く使われる言いさし文と、ブログの文体が話すことば的であるという事実を合わせて考えてみれば、ウェブ記号が付加された言いさし文と、そのウェブ記号との関係を探ることは、ブログの文体をとらえる上で効果的な方法の一つであると考える。

ここでは、言いさし文を対象として、先に見た終助詞と同様、接続助詞ごとにウェブ記号が共起しているか否かの対比によって考察を進める。次頁の表4には、ウェブ記号の有無別に出現頻度合計が10以上の接続助詞について、対数尤度比の降順に示している。なお、接続助詞についても男女を合わせた全体の数値を示している。

表4で有意差が認められるのは、「ケド」($G^2=8.04$)、「ト」($G^2=4.91$)、「ノデ」($G^2=3.90$)の3種類であることが分かる。出現頻度の合計では、「ノデ」(21)よりも、「シ」(86)、「ガ」

表4 接続助詞とウェブ記号の有無（頻度／対数尤度比）

	記号アリ (男女)	記号ナシ (男女)	頻度合計	G^2
ケド	92	27	119	8.04 **
ト	6	9	15	4.91 *
ノデ	18	3	21	3.90 *
テ	20	16	36	2.40
カラ	21	16	37	2.00
タリ	6	6	12	1.59
ノニ	8	6	14	0.66
シ	58	28	86	0.00
ガ	33	16	49	0.00
計	262	127	389	

* * = $p < 0.01$ * = $p < 0.05$

(49)、「カラ」(37)、「テ」(36)の各接続助詞の方が多いが、これらには有意差が認められない。また、「ト」(記号アリ6、記号ナシ9)は、ウェブ記号と共に起しにくいことに加え、出現頻度そのものが少ない。

この結果から、接続助詞の中でも、特に「ケド」と「ノデ」は頻繁に用いられ、かつ、ウェブ記号と共に起しやすい傾向にあることが分かる。これらの接続助詞の機能、また、言いさし文とそこに付加されるウェブ記号との関係性を確認することが、ウェブ記号と文体との関係を明らかにすることにつながると考える。そこで、以下では、4.2.1節で「ケド」、4.2.2節で「ノデ」を取り上げ、ウェブ記号と共に起しやすい関係について見ていくことにする。

4.2.1. 「ケド」

表4に示したように、「ケド」とウェブ記号が共起するのは92例であった。その内、「カッコつき文字」が61例、フェイスマークが17例、絵記号が14例であり、ウェブ記号の中では「カッコつき文字」が比較的多く用いられている。「ケド」とウェブ記号が共起する例としては(19)～(22)のようなものが確認される。

- (19) 自分勝手なときもあるけど (さすがB型!)
- (20) 最後の方は、殆ど更新も無く、ひたすらただ存在していただけだったけど (苦笑)
- (21) まあこれと一緒にブリトラとか借りようとしてたけど (邪)
- (22) まあ、今までそうだったけど 〽(〽)〽

「ケド」の機能については、白川(2009)で「参照情報の提示」として、次の3点が結論づけられている¹¹⁾。

- ①前言の補正/訂正/補足…含意のキャンセルのために但し書き的に付加
- ②相手の知識の状態についての想定
- ③相手の認識状況への改変の促し

白川(2009)では、これら3点について次のような説明がなされている。①「前言の補正/訂正/補足」は、「このようなケド節は、先行の文で話し手自身が言ったことを補正する機能を持つ。もっと言えば、先行する文から聞き手自身が導き出すかもしれない含意(implicature)をキャンセルするために、但し書き的に付加される」。②の「相手の知識の状態についての想定」については、カラ節との比較を行いながら「ケド節とカラ節との意味の違いは、背後にある暗

黙の前提によって帰結が含意されるか否かの違いに帰せられる。さらに付け加えるならば、カラ節とケド節とは、聞き手の知識の状態についての話し手の側の想定（査定）も異なるようである。カラ節の場合は、節の内容について聞き手が知らないと想定していることが多い（だから、しばしば終助詞の「よ」と近似した意味になる）が、ケド節の場合は、相手の知識に関してはまったく中立的であって、相手が知っていることを承知していても使うことが多い。」。③「相手の認識状況への改変の促し」は、例示した内容について、「話し手は聞き手の認識状況に対して何らかの改変を促すためにケド節によって参照情報を提示していると考えができる。「正樹」は、会議が始まる時間になっているにもかかわらず、それを忘れて仕事を続いている。「会議が始まる」という認識が一時的にせよ欠如しているという状況がこの場合における改変すべき聞き手の認識状況である。話し手にケド節の内容を持ちかけられることによって、聞き手は認識を改め、その結果として仕事を中断して会議に出席するというわけである。」と解説している。

白川（2009）が示した3種類のうち、②と③については、ケドが機能するための明確な「相手」の存在が必要となる。ブログにおいても、眼前に存在しない読み手を想定したととらえられるものはある。しかし、そのような内容が明示されているものは少数である。得られたデータのほとんどは、「①前言の補正／訂正／補足…含意のキャンセルのために但し書き的に付加」に相当する。そこで、以下に示す用例は、ウェブ記号が付加された一文だけではなく、「前言」に相当する部分も合わせて示すこととする。

次の（23）では、前言に相当する「一週間で勝ち総額は4万」に対して、「友達におごったり、GW中に使った生活費などでほとんど消えたけどね」、（24）では、「楽しいとかおもしろいとか、そういう感情持つ暇無く、ただひたすら読んでます」という前言に対して、「楽しいんですよ、幸せには違いないんですけど」とそれぞれ訂正をしている。ケド節の冒頭に、（23）では「ただ」、（24）では「いや」という語があることからも、「ケド」節で前述の内容を一部否定して訂正や補足を行っていることが分かる。

- (23) 先週の一週間で勝ち総額は4万になった (w ただ、友達におごったり、GW中に使った生活費などでほとんど消えたけどね (汁)
- (24) 二次試験で国語(特に古典)が重視されるらしいので、現在は時間の許す限り古文の本に手を伸ばすのが日課となってます。楽しいとかおもしろいとか、そういう感情持つ暇無く、ただひたすら読んでます (笑) や、楽しいんですよ、幸せには違いないんですけどおおお (泣笑)

(下線は筆者)

このような、形式として「ケド」で言いさす場合に、有意にウェブ記号が共起するということは、前言の内容を訂正したり補足したりするような機能が働く場合にウェブ記号が共起しやすいということである。その理由を考えるには、どういった場合に、自分が述べた内容(前言)を訂正・補正・補足する必要があるかをとらえる必要がある。

白川(2009:35)では、聞き手が不在である心中での発話について述べている箇所があり、そこでは「聞き手めあてでない用法をどう位置づけるかというのは、いずれ解決しなければならない課題である。」と、聞き手が存在しない場合のケド節の使用について言及している。そして、「「提示」だからといって聞き手存在発話を前提に考える必要はないのかもしれない。自分自身の認識状況を改変する、自問自答的な「条件の提示」という可能性もあってもよい。」と注を付け加えている¹²⁾。

ここで言う「自問自答的」は、まさに書き手が一人で書き記すブログにも当てはまるケースである。ただし、ブログにおける「ケド」での言いさし文では、「自問自答」に相当する例は少ない。やはり、述べ足りない内容を補正したり、前に述べた内容の一部について訂正を行ったりする場合がほとんどである。その補正や訂正を行う必要がなぜあるのかということと、そこにウェブ記号がなぜ共起しやすいのかということとの関係を考えてみたい。

(23)の前言では、何かのギャンブルで臨時収入があったことを述べている。この「勝ち総額は4万」という事実だけを述べて前言を終了させると、その「4万」は現在も手元にあることになる。そこで、「いったん手に入った臨時収入を自分以外のことにも使ったために消えてしまい、手元にはまったく残っていないという状況」を示すためにケド節で補正・訂正している。また、(24)では、「楽しいとかおもしろいとか、そういう感情持つ暇無く、ただひたすら読んでます」という前言では、ただ真面目に受験勉強に取り組むだけの姿が想起される。その機械的にこなす受験勉強に対して、実は幸せで楽しい面もあるのだとケド節で訂正・補足しながら、それが一種の強がりであることも示している。それは「けどおおお」といった表記からもうかがえる。

さらに次の(25)では、おそらく大阪在住(出身)の書き手が、先輩の「全体的に茶系」である(質素な)部屋と、自分の派手な部屋とを対比させて「うちなんか豹柄まみれや」としている。それに対して「と、いっても」と、実は一部だけしか豹柄の物はなく「まみれ」ではないと、前言の内容が大きさであることをケド節で訂正しているものである。「豹柄まみれ」という強烈な印象を、「じゅーたんとカーテンと座椅子」だけが豹柄であるという和らげがなされていると言える。

(25) 先輩の家に泊まっちゃった。えへっ。おつき~いくまさんとかおるし！全体的に薄

い茶系な部屋やった。うちなんか豹柄まみれや（笑）と、いつてもじゅーたんとカーテンと座椅子が豹柄だけなんやけどな（笑）

これらの用例を確認すると、前言には、書き手の身の回りで起こった事実や、それに付随する書き手自身の状況・所感がそのまま、あるいは誇張された表現によって記されていることに気付く。だが、そのような前言だけで文を終了させると、表現が強過ぎてしまう可能性がある。そこで、その強さを和らげるために、ケド節によって和らげを行っているととらえられる。つまり、ケド節には、前言の内容を和らげる緩衝機能があると言える¹³⁾。そして、そのような緩衝機能があるケド節にウェブ記号が有意に多く付加しているということは、ウェブ記号は緩衝機能と強い関係性をもつということである。三宅（2005：255）で、「絵記号の意味を特定するのは、文脈であったり、その直前直後の文の内容であったりする」と述べられているように、ウェブ記号の機能は、記号単体で確定するのではなく、文脈に依存する場合が多いと考えるべきであろう。ケド節の場合も、ウェブ記号は、直前のケド節がもつ緩衝機能を引き継ぎ、ケド節と共に緩衝機能を担っていると考えられるものである。

4. 2. 2. 「ノデ」

「ノデ」とウェブ記号とが共起する例には、(26)～(28)のようなものがある18例の内、11例が「カッコつき文字」、フェイスマークが7例、絵記号は本データでは確認されなかった。

- (26) 就職は大阪で決まってしまったし、棒に振るわけには行かないでの、とゆーか親がダメって言うので（笑）
- (27) 今日は体調悪いけど元気なので（爆）
- (28) 今風邪引いたらシャレになりませんので；；

有意差が認められた「ノデ」は、理由や原因を表す接続助詞であり、同じく理由・原因を表す「カラ」と比較されて論じられることがある（永野1952など）。接続助詞における両者の用法の違いについては、一般的に、「ノデ」がほぼ客観的で、「カラ」がほぼ主観的、「ノデ」は丁寧でやわらかな表現で、「カラ」は理由や根拠を強く際立たせているといった説明がなされる。また、国語辞典（『新明解国語辞典』第七版）では、口語の「ノデ」について、「後件を省略して理由・原因だけを述べる時は、言わなければならないこと、説明しなければならないことを言いにくそうに述べる気持ちが現れることがある。そのため、言い訳に聞こえることもある。」との説明がある。ここでは、以上のことと参考にしながら、ウェブ記号が有意に共起する「ノ

デ」について考えてみる。

上記の中で興味深いのは、国語辞典の語釈で「ノデ」に言い訳の場合があるとしている点である。たとえば、(29)では、年下に恋愛相談をする理由を自分の恋愛経験が少ないためだとしている。本来、相談に乗るべき年上の自分が、なぜ相談する側になっているのかということを、「ノデ」の言いさし文を連続して述べ、言い訳にしているととらえられる。ここでも前言を合わせて示すこととする。

(29) バイト先では私は年上のグループに分類される (T_T) 年下の子からよく恋愛の相談をされます。逆に相談してるって感じ まともな恋愛ってしたことがないんで (^ ^ ; ; 今の彼氏で初めて『あー、これが恋愛っていうんだ~』って知ったくらい なんで (遅っ !)

(29) では、「恋愛相談に乗ることができない」に対して、ノデ節で「まともな恋愛ってしたことがない」、「今の彼氏で初めて『あー、これが恋愛っていうんだ~』って知ったくらい」という言い訳がなされている。言い訳というのは、たとえ正当な理由があったとしても、潔くないというようなイメージがつきまといがちである。また、言い訳をすることに対して後ろめたさという感情を抱く可能性もある。そのイメージや感情をウェブ記号を付加することによって緩和させようとする意図が働き、それが「ノデ」とウェブ記号とが共起する要因となっているのではないかと考えられる。

次の(30)では、「目がチカチカ、指もぷるぷる震え」ているのに、さらに「表紙と前記と奥付を」やらなければならない状況について、「と言って毎日5時間は寝てますよ、今風邪引いたらシャレになりませんので」とノデ節が続いている。これも、どれほど大変な状況なのかを説明している内容の前言に対して、それでも大丈夫だということをノデ節で説明し、前言の大変さを緩和しているととらえられる。

(30) ペン入れとベタが終わりました。昭栄の頭はぬりながら目がチカチカ、指もぷるぷる震えながらでした (苦笑) 後は表紙と前記と奥付をやれば…！！と言って毎日5時間は寝てますよ、今風邪引いたらシャレになりませんので；；

以上で確認したように、言いさし文とウェブ記号とが共起する場合、接続助詞「ケド」と「ノデ」に有意差が認められた。ケド節には緩衝機能が認められ、ウェブ記号はケド節と共に緩衝機能を担うことを示した。また、「ノデ」に付加するウェブ記号には、文のもつイメージを緩和

する役割があるとした。このような記号類の役割・機能については、ケータイメールにおける使用に関する先行研究がいくつかある。そのほとんどは、記号類の役割・機能を、ことばへの強調・補足・追加のような位置づけでとらえてきた。たとえば、三宅（2005）では、ケータイメールの絵記号類6種のうちの一つについて、メールの雰囲気を楽しくする役割を担っているとした。また、佐竹（2002）では、ネット上の文章やケータイメールに使われる絵文字や顔文字について、「ことばが表す意味に何らかの情報を追加」、「感情を強調」、「ことばの情報の不完全さを補い、感情的な行き違いを避けようとする」と述べている。ことばに何かを「追加」し、また、ことばだけでは表現しきれない情報の穴を埋め、何らかの感情をより「強く」表現するための手段として用いられるのがこれらの記号類だという解釈が行われているのである。もちろん、ことば以外に情報を追加する役割や機能は、絵文字や顔文字など記号類の大きな特徴の一つであろう。しかし、それ以外に、ウェブ記号には、直前の文と共に、文の内容に対する緩衝機能があったり、直前の文がもつイメージを緩和したりする場合があると言える。

5. まとめ

以上、ブログの文体をとらえる一つの方法として、文をウェブ記号が付加された文と付加されていない文とに分類した上で、終助詞とウェブ記号、接続助詞とウェブ記号の共起関係についてみてきた。まず、終助詞では、書き手の願望や希望などを表す「ナ」が、他の終助詞よりも強くウェブ記号と共起することが明らかになり、反対に「カ」はウェブ記号と共起しにくい傾向にあることが分かった。また、もっとも多く出現する終助詞である「ネ」については、ブログという性質上<自己確認>の「ネ」が多く、その場合のウェブ記号も叙述内容に強く関係しているとした。

接続助詞では、「ケド」と「ノデ」が他の接続助詞よりもウェブ記号と共起しやすいことを示した。この2種類の接続助詞との共起関係において、ウェブ記号は、叙述内容を必ずしも補足したり強く表現したりするだけではなく、むしろ和らげる緩衝機能や緩和する働きもあることを示唆した。

本稿では、文末に現れるウェブ記号とモダリティ表現との関係について考察を行ったが、ここで示した結果は、ウェブ記号と同種の記号を用いる他のSNSの多くに共通する現象であり、類似の傾向が認められると考えている。つまり、文末に記号が用いられる場合は、文とウェブ記号との間にある種の関係がいくつか認められ、一般化が可能であるという立場である。たとえば、Twitterでは（23）のような例が観察される。

(23) あや↑ちゃん↓笑

試合のとき声かけてくれてありがと (^^♪

おたがい陸上がんばろう 🏃‍♀️ (大阪府豊中市在住、高校生女子のTwitterより)

ここでは、改行ごとにウェブ記号が使われており、出現位置は必ず文末である。またウェブ記号は「ありがとう」や「がんばろう」という語の意味に付随するものであり、それゆえに共起しているととらえるのが自然である。こういった例が多く観察されるという事実は、前述した筆者の考え方を保証する背景となるだろう。検証を今後の課題としたい。また、本稿では、性差については触れなかったが、男女別の結果では差がある項目もいくつかある。合わせて今後の課題としたい。

注

- 1) 文節数2以下とするのは、漢字、句レベルの短い内容を対象とする便宜的な措置である。ブログ以外の書きことばにおいても、説明などを付け加えることを目的として、文末、あるいは文中に（ ）でくくられた文言が入る場合は多々あるが、たとえ（ ）でくくられても際限なく長い文は対象としないという意味である。
- 2) 複数個連続するとは、「??????????」や「!!!!!!!」のような場合である。たとえば、「努力が報われる日はくるのかな????????????」のような例がある。
- 3) 岸本（2005b）では「読み手を意識した表現」の一つとして終助詞（ヨ／ネ）の使用を取り上げ、読み手意識表現全体（1,676）の中で丁寧体に次いで多く出現する項目としている。
- 4) 当該著書の「まえがきiv」において、「終助詞ネと視線」（第4章）の分析結果の報告は孫が行っている旨の記述がある。
- 5) 対数尤度比とは、ある現象が二つの別の母集団で出現するときに、それらの出現頻度の差が有意であると推測するもっともらしさ（尤度）を統計学的に検定するために用いる指標であり、 G^2 (G-square) やGスコアなどとも呼ばれる。実測値と期待値の差に注目し有意差を判定する検定であり、対数尤度比における基準値統計量はカイ二乗検定のそれと同じである。具体的な計算方法を、表3の終助詞「ナ」を例に、「記号アリ／ナ／頻度113」を[A]、「記号アリ／ナ以外／頻度301」を[B]、「記号ナシ／ナ／頻度39」を[C]、「記号ナシ／ナ以外／頻度207」を[D] として説明する。まず期待値を求め、次に対数尤度比を求める。[A] の期待値は、[ナの総頻度] * [記号アリの総頻度] / [総頻度] で求められるので、 $152 \times 414 \div 660 = 95.34$ となる。対数尤度比は、 $G^2 = 2 \times \sum \text{実測値} (\log e(\text{実測値}) - \log e(\text{期待値}))$ の公式で求められる。Σは総和なので、[A] : $2 \times 113 \times (\ln(113) - \ln(95.3)) = 38.39$ と同様の計算を [B] [C] [D] で行い、これらの総和をとる。その結果の11.86が対数尤度比となる。LNは自然対数を表しエクセルの関数で求めることができる。有意差については、0.1%水準の場合（有意差があるという判断が誤りである可能性が0.1%以下であるという水準。p=0.001）、その判断を棄却する基準値統計量（限界値）である対数尤度比は10.82であり、検定で得られた数値が基準値統計量を上回っていれば有意差があり、同じか下回っていれば有意差はないと判断する。

6) アスタリスクは、***が $p<0.001$ であることを、**が $0.001 \leq p < 0.01$ であることを、*が $0.01 \leq p < 0.05$ を意味する。表3の終助詞「力」の対数尤度比は17.87であり、これは、0.01%水準($p=0.0001$)での基準値統計量15.13を上回るが、表内での煩雑さを避けるため***をしている。表4も同様。

7) 野田(2016)では、「なあ」は、日本語記述文法研究会(編)(2003)によると、「ある事態を認識したことから引き起こされる感情の高まりを詠嘆的に表す終助詞」であり、「独話や心内発話のよう非対話的な環境に現れるのが基本(264頁)である。たとえば、「寒いなあ」といった表現は、基本的に独話に現れる。しかし、「聞き手や読み手の存在を意識したうえで、「なあ」が使われることがある。」と述べている。

8) 調査資料である、テレビ番組の画像・番組名・視線・発話内容などが用例として示されている。そのうちの発話内容についてのみ記す(用例掲載ページは筆者が付記した)。話し手の視線行動と関連付けられている「ネ」には下線が付されており、「+」は発話の分断を表す記号とされている(p.46)。

〈同意要求〉 a:ええ、本当になんか家のなかじめじめっていうのは、気分悪いですねえ。
b:そうですねえ。あの、畳の上、歩いてちょっと足がべたっとするような+
a:ねえ。
b:+感じっていやですねえ。 (p.124)

〈確認要求〉 a:え、今日のお話は、x協会理事のbさんです。
b:よろしくお願ひします。
a:bさん、きょうのお話は二つですね。
b:え。
a:あの、日本の消費者にもかかわりがあり、また世界的に大きなテーマとなってます問題
を二つ取り上げたいと思ってます。 (p.125)

〈自己確認〉 a:そのへんが+
b:だって
a:+まあ、自己顕示欲というか、まあ、そのへんが、まあ+
b:いいえいいえいいえいいえ。
a:+社長の器なのがなあ+
b:いいえいいえいいえいいえ。
a:+とも思いますけどね。 (p.126)

9) 孫(2013:133)では、「聞き手に反応を求めない〈自己確認〉のような場合には、聞き手に反応をうながす必然性がないので、聞き手に視線を向ける行動は必ずしも行われなかつたと考えられる。」としている。

10) 用例(14)～(16)はそれぞれ対者敬語が用いられており、その点において、読み手への働きかけがまったくないと言い切ることはできない。だが、ここで強調したいのは、あくまで具体的な叙述内容を読み手に差し出した上で確認や反応を要求することを第一の目的としているか否かであり、用例からはそれを読み取ることは難しいと考える。

11) それぞれの説明として次の用例が挙げられている。

- ①前言の補正/訂正/補足…含意のキャンセルのために但し書き的に付加
 - こずえ「五代さんね……」
 - 響子「はい?」
 - こずえ「あたしの初恋の人にそっくりなんですよ。」
 - 響子「まあ!!」

こずえ「あたしが一方的に憧れてただけなんだけど。」

(高橋留美子『めぞん一刻2』p.193)

②相手の知識の状態についての想定

会議が終わりましたけど。

③相手の認識状況への改変の促し

[早苗が入ってくる]

早苗「失礼します。会議が、もう始まるそうですけど……」

正樹「え？（と、時計を見る）あ……（わすれていたのだ）」

(蒲田敏夫『男たちによろしく』p.45)

12) 自問自答の用例として次が挙げられている。

響子「(心の中で) 今の…五代さんの声に似てたけど……そんなはずないわね。」

(高橋留美子『めぞん一刻II』p.52)

13) たとえば関西弁では「あんなにシュッとしてる人やねんから絶対めっちゃモテるはずや。(よう) 知らんけど」(筆者作例) のように、言いさし表現のケド節として「(よう) 知らんけど」を付加させることがある。このような場合も、強い表現で言い切る前言に対して、それを和らげるためにケド節が付加していると考えられる。ケド節に緩衝機能が認められる例である。

参考文献

- 新井保裕(2017)「Twitterに現れる省略現象の日韓対照研究—言語とメディアの特徴に注目して—」第21回ひと・ことばフォーラム特別公開研究会 発表資料.
- 石井正彦・孫榮夷(2013)『マルチメディア・コーパス言語学—テレビ放送の計量的表現行動研究—』大阪大学出版会.
- 石川慎一郎(2008)『英語コーパスと言語教育』大修館書店.
- 沖森卓也・笛原宏之・常盤智子・山本真吾(2011)『図解 日本語の文字』三省堂.
- 岸本千秋(2017)「ブログの計量的文体研究—文とウェブ記号の関係を中心に—」『阪大日本語研究』29 pp.71-99 大阪大学大学院日本語学講座.
- 岸本千秋(2005a)「ウェブ日記文体の計量的分析の試み」『武庫川女子大学言語文化研究所年報』第16号 pp.5-17 武庫川女子大学言語文化研究所.
- 岸本千秋(2005b)「ネット日記における読み手を意識した表現—公開意識との関連から—」『メディアとことば』2 pp.204-231 ひつじ書房.
- 小林賢次(1992)「原因・理由を表す接続助詞—分布と史的変遷—」『日本語学』11-5 臨時増刊号 pp.131-141 明治書院.
- 佐竹秀雄(2002)「変容する「書くくらし」」『日本語学』21-15 pp.6-15 明治書院.
- 佐竹秀雄・佐竹久仁子(2005)『ことばの表記の教科書』ベレ出版.
- 白川博之(2009)『「言いさし文」の研究』くろしお出版.
- 総務省(2011)「次世代ICT社会の実現がもたらす可能性に関する調査研究」報告書(委託先:株式会社KDDI 総研) http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/linkdata/h23_05_houkoku.pdf.
- 永野賢(1952)「「から」と「ので」とはどう違うか」『国語と国文学』29-2 pp.30-41 東京大学国語国文学会.
- 日本語記述文法研究会編(2003)『現代日本語文法4 第8部 モダリティ』くろしお出版.

- 野田春美 (2016) 「終助詞による表現の広がり—周辺的な用例から見えてくること—」『日本語学』35-11 pp.2-11 明治書院.
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法-改訂版-』 くろしお出版.
- 三宅和子 (2005) 「携帯メールの話しことばと書きことば—電子メディア時代のヴィジュアルコミュニケーション」『メディアとことば2』 pp.234-261 ひつじ書房.
- 宮崎和人 (2002) 「終助辞「ネ」と「ナ」」『阪大日本語研究』14 pp.1-19 大阪大学大学院日本語学講座.
- 宮島達夫・近藤明日子 (2011) 「古典作品の特徴語」『計量国語学』28-3 pp.94-105 計量国語学会.
- 森田良行 (2002) 「日本語の助詞・助動詞」飛田良文・佐藤武義編『現代日本語講座第5巻 文法』明治書院.
- 森山卓郎 (2000) 『ここからはじまる日本語文法』 ひつじ書房.

(博士後期課程学生)

(2017年8月15日受付)

(2017年10月12日修正版受付)

(2017年11月11日掲載決定)